

30年ぶりのヨーグルト

1980年代に青年海外協力隊稲作普及員としてケニアの地方事務所で普及活動に従事した。およそ30年を経て再びケニアで農村開発プロジェクトの業務に就く機会に恵まれ、かつて稲作振興とともに働いた農家を訪ねた。

地形が変わったのか、ほぼ毎日通った村に容易にたどり着けなかった。あれから、感染症の蔓延で人口が激減し、その後に近くの川の氾濫があり、多くが離村したせいであった。水田は消え、稲作はもうやっていない。折よく出会ったお年寄りが、婦人会のリーダーだった人の家まで案内してくれ、会計係だったメアリおばさんも満面の笑みで再会を喜んでくれた。例によって「お腹すいてるんじゃないの?メシを食べていきな」と食事がすぐに出てくる。孫たちとともにおばさんが台所に引っこむ。男性ホストが不在の場合、ゲストは独りで食



事をする。マジワ・ララを、孫娘を近所の店に走らせて買ってきてくれた。マジワは「牛乳」、ララは「眠る」を意味するスワヒリ語。寝かせた牛乳。つまりヨーグルトである。あの頃、農家を訪ねるたびに「飲んでいって」と言われた。牛の生乳を素焼きの瓶に入れて発酵させたもので、いつも真っ黒にハエがたかっていた。覚悟を決めて一気に腹に収めた。飲みっぷりがいいので、「このムジャパニ(日本人)はマジワ・ララが好き」と評判になり、ほかの訪ね先でもマジワ・ララで迎えられるようになった。30年を経て、工場製のテトラ・パック入りヨーグルトである。トンガリ部分をナイフで切り取り、コップに注ぐ。薄暗い部屋で一人で摂る食事だった。ヨーグルトは、相変わらず酸っぱかった。(清治 有)

“アールディーアイ通信 No. 92/2017”から

写真:メアリと村の子どもたちと一緒に ケニア・ムエア 2014年

コスタネラ(川浴い公園)

アルゼンチン北東部コリエンテス州の州都コリエンテスは、パラナ川のほとりにあって、対岸のチャコ州の州都レシステンシアと長大な橋で結ばれている。川岸はコスタネラと呼ばれる広場や公園に整備され、散歩したり犬の散歩をしたり、市民の憩いの場となっている。最近アルゼンチンは健康ブームで、街にはスポーツジムが増え、コスタネラでは男女ともにジョギングをする人が多くなった。

夏になると、涼を求めて川遊びシーズンになる。水辺で遊んで、日光浴をする人もいれば、釣りをする人も多い。休日は岸壁から大人も子供も多くの人が釣り糸を垂れている。コリエンテス女子は水着にはうるさく、T



バックは当たり前、目のやり場に困ることもある。岸から数メートルまでは腰程度の深さだが、その先は急に深くなり流れも強くなって危険である。遊泳禁止のロープが張っており、そこから出ると監視員に怒られる。釣り道具屋でブイを買って体に付けると、ロープの外でも泳ぐことができる。

コスタネラで見る夕日がとてもきれいでよく散歩に行った。広々とした川面を眺めていると、時間もゆっくりと過ぎていく。

(及川義明)

“アールディーアイ通信 No. 91/2017”から

写真:パラナ川で犬と遊ぶ少女 アルゼンチン・コリエンテス 2016年

オールドマンの村、国は、今

日本で暮らしているのに、次の横町を曲がるとリベリアのボンダイ村の路地へつながっているような気がする。1988年7月から2年弱の間、青年海外協力隊の村落開発普及員として暮らし、仕事をした、村民100人強の村である。

少し高いところを広場にして、手作り土壁のモスクと数軒の家が囲んでいた。そのうちの1軒の別棟を三食賄い付きで借りた。村民がオールドマンと呼ぶ家主は、炭焼きと換金作物で生計を立て、2人の夫人とその子を合わせた大家族を養い、村内会議でまとめ役になり、長老の中で厚い信頼を得ていた。モスクのベンチで夕涼みをしながらオールドマンは時に、イスラム教や大家族生活のこと、その中での男子としての所作を20代の私に語った。寡黙で決して怒らない、裸足で農作業をするせいか足がカチンカチンで、足音でわかると冗談で言われていた。

90年代の内乱の時代を、第二夫人の双子の娘たちは生き延びただろうか？村で建設中だった小学校は？



隣村で改築した診療所は？政情は安定したようだが、一昨年エボラ出血熱に襲われた。あれから27年、あの国へ帰って仕事の続きをしようと開発協力関連の業務に従事してきたような気がする。治安悪化による任期半ばの帰国であったためか、村での仕事が今でも自分の中では完結していない、終わっていないという思いでいる。(佐藤宏幸)

“アールディーアイ通信 No. 90/2017”から

写真: オールドマン(写真右)と双子の姉妹を抱く第二夫人 リベリア・モンセラード州 1988年

体験してわかる断食(ラマダン)のご利益

トルコに2015年3月から2年間滞在した。人口の99パーセントがイスラム教徒であるために重要な時期である断食月、ラマダンにまつわる話をお届けする。1カ月間、日の出前から日没後まで飲食を一切断つ。小さな子供、妊婦、病人、老人、そして旅行者は免除される。一部の高級レストランや喫茶店を除き、飲食店は日中、閉店する。配属先であったギレスン県食糧農業畜産局の職員も、毎日17時間に及ぶ断食にじっと耐えていた。これを見て、私も実行を決意した。

実際に行ってみると、未知の領域の空腹感に陥った。野外作業時は脱水や貧血状態となったが、水や食糧の大切さを実感し、十分に得ることの出来ない貧しい人達のことを思うようになった。そして、日没後にとる栄養タップリの夕食(イフタール)を本当に楽しむことが出来た。イフタールは、しばしば友人を招くパーティーに



なる。全国で市庁前広場などに市がイフタール会場を設置し、食事を無料で提供する。きっかけは貧しい人達への奉仕活動だったが、今では市民の憩いの場になっている。小さな行政組織(村)であると専従の職員がいないために通常は行わないが、村長や村の有力者が寄付金を出し合い、モスクで村人に無料で食事を振る舞うイフタールを行うことがある。これはたいへん豪華だった。(里見洋司 元野菜栽培分野 JICA シニア海外ボランティア) “アールディーアイ通信 No. 89/2017”から

写真: 市庁舎前の広場のイフタール トルコ・エルジンジャン県 2016年

♪チャリタクに乗って♪

ザンベジア州の州都キリマネは、モザンビークで4番目に人口(約20万人、2007年)が多い町である。大きい町と言っても、中心街は端から端まで歩いて移動できる広さしかなく、こぢんまりとしている。タクシーはほとんど見かけず、市内循環の公共交通機関もない。そこで自転車タクシー(チャリタク)が庶民の足として活躍する。荷台にはクッションが取り付けられてあり、がたがた揺れたり跳ねたりする道でも、お尻が痛くなることはない。朝の通勤・通学時間帯や午後の帰宅時間帯には、通りのあちこちから「タクシー！」と呼ぶ声がかかる。市の北側を流れる大きな川の向こう側との間を、片道10分くらいの便船が1日4~5往復する。着く頃を見計らってたくさんの自転車タクシーが待機している。



写真:乗船客が出てくるところ待機するチャリタク モザンビーク・ザンベジア 2017年

滞在先から自転車タクシーで3、4分の距離にある店への買い物によく利用する。料金は一律10メティカシ(約20円)で、中心街ならどこにでも行くことができる。学生は交渉して安く乗っているようだ。自転車の二人乗りはどこか懐かしい。風を感じながら見る街の景観や歩く人たち様子から、暮らしや伝統や慣習の新たな発見がありそうだ。(大竹雅洋)

“アールディーアイ通信 No. 88/2017”から

農繁期は通勤農業

モザンビークのキリマネ市付近の農民は、郊外の自分の田んぼへ乗り合いトラックなどで通勤耕作をする。ザンベジア州の州都キリマネから北へ向かう国道470号線沿いに田畑が広がっている。農家のほとんどはキリマネに家があって、15~20キロメートル離れたところに持つ田畑に農繁期は毎日「出勤」する。通勤手段として乗り合いトラック、バイク、自転車、徒歩がある。徒歩で2~3時間かけて通う農民もいる。朝6時台には鍬を抱えた農民を満載した通勤トラックを見かける。すし詰め状態で乗車しているが、全員足は荷台に収め



写真:停車中の通勤トラック モザンビーク・ザンベジア 2017年

ている。トラック乗車に定員制限は無く、何人乗っても足さえ外に出ていなければ警察のおとがめがないらしい。女性が多く、マンゴーを食べたりおしゃべりしたり楽しそうである。時々停まって乗客が降り、自分の田畑まで遠い人だと直線距離で1.5キロメートルをさらに歩く。農道のない、モザイクのように複雑に配置された田んぼと田んぼの境を歩いていく。午後にはまたトラックに揺られて家路につく。(清治 有)

“アールディーアイ通信 No. 87/2017”から